

Question 1

小児での舌下免疫療法について、処方に対する注意点と継続の工夫について教えてください

A 小児におけるアレルギー性鼻炎患者は増加しており、小児期に発症すると多くは治療することはなく長期間症状を呈することになる。またアレルギー性鼻炎は、重症化すると生活の質の低下や睡眠障害などを引き起こすことが知られており、症状に合わせて適切に治療を行うことが求められるが、小児においては自らの訴えに乏しく、得られる情報が限られており、アレルギー性鼻炎の診断を行うことは容易ではなく¹⁾、重症化してから受診される場合も多い。

アレルギー免疫療法は、原因となる抗原を体内に入れ、数年かけて抗原に対する反応を弱めていく治療法である。アレルギー免疫療法の中でも、舌下免疫療法は有効性と安全性のバランスがとれた治療法であり、わが国においても2014年から保険適応となった。さらに2018年からはスギの舌下錠およびダニの舌下錠において、小児に対しても適応が拡大し小児での施行例も増えつつある。舌下免疫療法は、年単位で適切に行った場合、症状の改善だけでなく、アレルギー性鼻炎や喘息に対する自然経過の修飾も期待できる。すなわち、個々の患者の新規アレルギーに対する感作が抑制されることや、花粉による小児アレルギー性鼻炎患者の場合には、その後の喘息発症頻度が抑制されることなどが報告されている²⁾。このことより、小児において舌下免疫療法を開始する意義は大きいと考える。

小児アレルギー性鼻炎において舌下免疫療法を勧める患者は、長期間鼻炎に対して薬剤を服用している小児患者や、薬物療法で症状の改善が得られていない小児患者、もしくは薬剤の使用により眠気などの副作用が起きやすいなど、薬剤の使用を減らしたいと希望される小児患者などである。このような患者の保護者に対して、舌下免疫療法という治療の選択肢を提示している。

小児において舌下免疫療法を開始するうえで重要なことは、合併するアレルギー疾患のコントロールである。小児期においては、遺伝的要因の影響を受けることも多く、出生早期からアトピー性皮膚炎、食物アレルギー、気管支喘息などの疾患を次々と発症するアトピーマーチといわれる経過をたどる小児も存在する。他のアレルギー疾患を合併している小児においては、それらの治療と協調して行うことが重要であり、またそれらの疾患が舌下免疫療法開始前に十分にコントロールが得られていることが必須である。その上で、希望される小児においては血液検査を行い、ダニもしくはスギ特異的IgE陽性であることを確認する。

小児に対し舌下免疫療法を開始するまでの準備として、十分に保護者にも理解を得る必要がある。保護者にとっては、聞きなれない全く新しい治療法であるため、時間をかけ、できれば書面で説明することが望ましい。特に開始初期には起こる可能性が高い、局所の副反応への対応や、アナフィラキシーが起こった場合の対応、また運動前後の服用は避けることなど、具体的に説明しておく、開始してからのトラブルは少なくなる。学校に対して舌下免疫療法を行っていることの連絡を希望される場合は、日本学校保健会から出されている「学校生活管理指導表(アレルギー疾患用)」などを活用する。また、保護者に1カ月に1回は受診が必要であることも説明し、長期間継続できる処方先を提示することが望ましい。

初回投与は医療機関で行うが、当日も再度服用方法、開始後の注意事項について説明を行う。その後全身状態や口腔内を観察した後、初回投与とする。服用する前には、手洗いをし、自分で薬剤の開封や服用を行わせ、保護者にも確認していただく。服用後も手に抗原の付着があるため、再度手洗いをするように指導する。その後30分の経過観察後、再度診察を行い帰宅とする。帰宅の際には、服薬状況および副反応や症状を記録するアレルギー日誌または服薬ノート(図1)を手渡し、再診時に持参するように指導する。開始初期は、2週間ごとに副反応を確認し、その後1カ月ごとの観察とする。開始後は、学校の課外活動やインフルエンザワクチン接種など、服用させてよいかどうか、保護者からの相談を適宜受けることができるような体制をとることが望ましい。

約1カ月経過すると副反応も治まり、アドヒアランスを保つことや継続することを目指す。小児の場合、特に小学生では日々の服用継続には、保護者からの声掛けも重要であるため、可能な限り協力をお願いする。一方中学生においては、患者自身が治療の必要性を自覚することが継続につながる。受診時には、アレルギー日誌または服薬ノートのチェックや、受診予約を行うことで受診の有無を確認し、来院しない場合は連絡し来院を促すことも継続には有効である。

舌下免疫療法の効果は、ダニの場合は数カ月、スギ花粉の場合は開始後最初のスギ花粉飛散期より認められることが多いが、小児の場合でも、期間を決めて問診票などで定期的な評価を行うことが望ましい。Face Scaleは簡便で小児にもわかりやすく、回答が容易である。評価結果につい